

ケニアの闘牛のスポーツ性

中林 伸浩

桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部

(2011 年 3 月 15 日 受理)

ケニアの闘牛のスポーツ性

動物とともにおこなうスポーツにはどのようなものがあるだろうか。まず思いつくのは、馬に乗るスポーツ（競馬、ポロ、馬術）だが、それは馬とヒトとが相互協力をして、つまり「人馬一体」となって競うものといえる。もっと身近なところでいえば、犬を連れての散歩は、単純なウォーキングとくらべて、友としての犬との交流という独自の要素が加わっている。他方、イギリス人の好きなドッグレースでは、犬は電気仕掛けのウサギを追いかけてコースを走り、ヒトは金を賭けて観るだけなので、これをヒトの「スポーツ」と見るか、定義しだいで微妙なところである。相手が牛となると様子が違ってくる。スペインの闘牛では、牛はヒトを襲う動物であり、闘牛士はそれを剣でもって退治する。ロデオに使われる牛でも、野生的であることが前提であり、ヒトはそれを捕えて屈服させなければならない。こうして大雑把に見ても、ヒトと動物の組み合わせによるスポーツは、ヒトだけのスポーツより、かえって文化的に複雑な内容をもつことがうかがえる。これを「文化スポーツ」の一側面として考えてみたい。

ここで筆者がいくらか直接的な知識がある西ケニア・カカメガ地方のイスハ人の闘牛を、

かれらの主要なスポーツとして述べてみようと思う。たしかに今では、首都では市民が何千人も参加するマラソンがあるし、ケニアのエリート・ランナーは世界に知られている。プロのサッカークラブもある。しかし、人口の大半をしめる農村部では、「スポーツ」を実行する習慣がないし、生活上の余裕もないといってよい。植民地以前からこの地方に一種のレスリングや力比べがあったと聞いたが、今は全く行われておらず、これについては何ともいえない。ところで、この地域の闘牛はスペイン風の闘牛士によるものではなく、日本でも数か所（宇和島や沖縄）で行われているものと同じ、二頭の牡牛による角突き合いである。

さて、二頭の牛が闘うのがヒトのスポーツといえるだろうか。たしかに日本の闘牛では、観衆がアリーナの外にいて見物している。牛と一緒に激しく運動しているのは、勢子とよばれる何人かの行司役だけである。ところが私が見たカカメガの闘牛はやや趣が異なる。観衆と勢子という区分がない。いわばその場の全員が勢子であり、観衆である。それは闘牛場という観衆と牛をへだてる特定の場所ではなく、野原、運動場、休耕地などで自由におこなわれることにも関連する。そしてこの競技に参加する大半は、中立の観衆で

はなく、どちらかの牛の味方である。

競技はたいてい日曜日の朝おこなわれる。ひとびとは牡牛の持ち主の家に朝、日が昇る前から集まってくる。かれらはこの牛とその持ち主の応援者なのである。実際かれらは持ち主の隣人たちであり、この地方の近隣組織の特徴からして、その大部分は同じ氏族のメンバーである。つまりこの闘牛は、最初から地域対抗あるいは氏族対抗の様相があるのだ。かれらは日が昇るか昇らない時間（午前6時ごろ）から出発して、牛を先頭にして、駆け足でその日の決められた場所へでかける。百人ほどの部隊が、手に棒や木の枝をもち、歌を高らかにうたいながら村の中を行進してゆく。太鼓や笛などの囃し手が付いている場合もある。こうした応援部隊の大半は若者（女性ほとんどいない）である。この行進は闘牛開催のデモンストレーションでもあるので、近くの人々も集まってくる。相手の部隊も到着すると、数百人という規模の参加者になる。

いよいよ闘牛が始まる。人々は歓声をあげて牛の周りを取りかこむ。牛は鋭い角（尖らせてある）を振りかざして突き合う。人々の持っている棒は、けしかける道具でもあり、牛の突進をかわす道具でもある。一進一退、しかし時に牛は激しく走るの、牛について、けしかける人々や、追われて遠巻きで見て人々などバラバラになる。また牛が向き合わせられる。こうして30分ほど、どちらかの牛が逃げ出して完全に戦意を失なっ

たとき、勝負がつく。この状況は単に牛同士の闘いではなく、二頭の猛々しい牡牛を介して人々は闘牛を自ら競技していると見ることができる。カカメガの闘牛は、日本における闘牛のように入場料のある見世物になっていない。また、宗教性、儀礼性のない、エンターテインメントになっている（勝った牛主には賭け金が手に入る）。

他方でこの闘牛は、この地方の特別の葬儀における儀礼的行動と共通点がある。それは、シレンベと呼ばれる伝統的な戦士の葬式で、やはり牡牛が人々の前に連れ出されて、その雄姿を披露するのである。シレンベはその内容からして植民地時代以前から存在したことは明らかである。闘牛のほうはもしかすると植民地時代以後、シレンベが脱宗教化して発達した形かもしれない。いずれにしても、闘牛の文化的な側面を知るには、このシレンベをまず見なければならぬ。

戦士あるいは勇者はムワミと呼ばれ、英語ではチーフと訳される、政治的リーダー、あるいは氏族の重要人物のことである。多くの氏族がテリトリーをもって生活しているこの地方では、かつて諸氏族をまとめる地位とか首長というものが存在しなかった。それに最も近いのがこのムワミで、それは彼が外敵と戦うために、自分の氏族だけでなく、周囲の氏族の男たちを組織し、勇敢に戦い、敵を殺したのである。彼らがムワミとされるのは、

生まれつきの地位ではなく、ひとえに彼らの戦士としての資質による。そして彼らの死に際しては特別の葬儀が行われる。

このシレンベとよばれるムワミの伝統的な葬式は非常に規模が大きいことは注目される。多分、現在の教会による葬儀も、形はキリス



ト教的であるが、大勢の人を集めて、死者をほめたたえる本質はシレンベを継承している。またシレンベが特異なのは教会に依らない唯一の伝統的な葬儀であることだ。事実、布教の歴史がすでに100年以上あるこの地方の諸教会はシレンベに否定的である。それがキリスト教以前の宗教的儀礼（とくにヤギやウシの犠牲）や、死霊の観念に結びついているからだ。現在シレンベをしようというのは、そうした社会的、宗教的な異端であることを認めることでもある。私が20世紀末に見たシレンベは、いずれも20世紀初めの生まれで、若い時に実際のムワミであったり、あるいはイギリスの戦争に駆り出されて戦場に行った者たちであった。彼らの殆どは一応クリスチャンであったが、死に際しては、キリスト教徒としてよりはムワミとして埋葬されることを望むことを言い残していたのである。残された家族はこの遺言に従わざるをえない。ムワミの死霊はとくに強く祟ると信じられているからだ。

シレンベの当日は、教会葬とはちがいが、讚美歌は歌われない。普通の教会主催の葬儀では参加者の半分以上を占める女性たちも隅の方で見物しているだけである。すでに棺が埋葬された場所（死者の家の庭）に向かって四方から牡牛を先頭に立て、シレンベ特有の歌をうたいながら、駆け足でやってくる。その様子は闘牛に向かう一隊そっくりである。違うのは、男たちの中に、木の棒のかわりに本物の槍をかざしている者がいることだ。そして闘牛との最大の違いは、集まってくる牡牛が二頭だけではなく、数キロ以内の牡牛が全部が順にやってくることだ（ふつう20頭ほど）。ここで牛を意図的に闘わせることはしない。牡牛に数頭の雌牛、子牛が従うこともある。これらの牡牛と人の一団はそれぞれの氏族を代表している。墓の場所にくると、順番に牡牛を墓の上に導き、人々は槍や棒を振りかざしながら、歌をうたい、とび跳ねながらそのまわりを巡る。これを人々は「シレンベを踊る」

と言う。

「シレンベを踊る」のも、人びとが闘牛をするのも、牡牛を中心に行っているところは全く同じである。一方は死者を埋葬し、死霊を慰めることを目的にし、他方は競技をして勝ち負けをきめるのを目的に行っている。ここから、スポーツの儀礼性やスポーツの儀礼起源が論じられているのは周知の通りである。しかし儀礼行為がスポーツ性をもつ場合があり、スポーツが儀礼の一部にとりこまれる場合もある。儀礼とスポーツは裏と表のような関係にある。とくに動物がかかわるスポーツは文化的背景が重要である。そこでこの地方の牧牛の文化の概要であるが、カカメガの生業は農業（特にとうもろこし）が主で、畜業はいわば副業である。数でいえば羊の方が多いが、牛は畑地に次いで重要な財産である。なかでも雌牛は仔を生むし、乳を出す。雌牛を持つことは、蓄財を意味する（もっとも、ここでは2、3頭持っていればよい方であるが）。雄の牛は去勢牛（ox）として、畑の鋤耕作につかう。しかしこれを持っている人は少ない。必要な時に借料をはらって借りればよいからである。雄牛一般は育てる手間がかかるだけなので、早めに業者に売る。こうして少数の種牛だけが牡牛（bull）として残される。

また、人と牛との等置ともいうべき興味深い事柄もある。結婚に際して、夫方は妻方に対して贈り物をするのだが、その中心は数頭の牛である（子牛を含めてもよいが、雌の成牛が必ず含まれなければならない）。この牛は、結婚が不首尾になって娘が戻ってきた場合、返却しなければならない。これが女性と牛の「等置」だとすると、男の場合の等置は殺人事件が起きた時、被害者側に加害者からおくられる数頭の牛である。もっともこの慣習は、警察・裁判・刑務所制度の成立によって今ではほぼ消滅した。

こうした牛文化を背景にしてみると、牡牛がこの地方の男の社会的・性的な特質の一つ

に類比されることが理解できる。牡牛は多くの雌牛や子牛を引き連れるリーダーであり、種牛として繁殖の主体であり、体の大きな力持ちである。シレンベはこうした牡牛をムワミの墓の上につれてきて、いわば氏族の代表として、死んだ勇者に最後のわかれをするという構図になる。

一方闘牛は、シレンベにおけるような宗教儀礼的な含意は全くない。しかし、牡牛のもつ意味はよく似ている。牡牛は勇者であり、男性性に満ちた生き物である。牡牛の持ち主は、小さい時から糖蜜をまぜた草などを与えて、慎重に育てる。闘いに備えては力をつけると信じられている特別な薬草やビールを飲ませる。こうして闘牛に勝つことは、持ち主の分身の勝利である。闘牛には金が賭けられていて、勝った牛の持ち主がそれを得るわけだが、闘牛が賭け金目当てだけの勝負でないことは言うまでもない。イスハの闘牛は、男と牡牛の類比あるいは等置という人生観にまで達しているようだ。

男と牡牛の類比というのは、牧畜民族ならどこでもありそうだが、そうでもない。それはスーダンのナイル川流域に住むヌアー人の場合であるが、このアフリカでも典型的とみられている牛牧社会には、エバンズ＝プリチャードの有名な民族誌がある。それによると、ヌアー人の成人男子は牡牛 (bull) ではなく、去勢牛 (ox) に自らを「同一視」する。一体これはどうしたことか。

ヌアー人の個人の名前に去勢牛の名前からとった「雄牛名」(ox name) がある。これは基本的に、成人式を終えて大人になった男の名前である (女にはこれはない)。彼はこの特定の牛と自分を同一視する。この去勢牛(雄牛)は若者の友であり、仲間である。彼はそれとともに遊び、かわいがる。彼はそのために詩を作り、面前で歌ってやる。彼は房をつくって角の一方につけてやり、牡牛が首を振り動かしてそれが風になびくのを満足げに見やる。このような去勢牛と男との同一性をエバンズ

＝プリチャードは次のような説明をしている。

「ところで、牡牛ではなく、なぜ去勢牛 (雄牛) と同一視がなされているのであろうか……これに対する常識的な答えは、ごく少数を除いて彼らはすべての牡牛を去勢してしまうので男たちみんなに行き渡るほどの牡牛がいないということである……供犠上の等性は男と去勢牛 (雄牛) とのあいだにある (男のために犠牲にされる) ……」。「牡牛と去勢牛 (雄牛) に対する評価の仕方がヌアーとわれわれでは異なっている……われわれにとっての去勢牛 (雄牛) は、牡牛とくらべると、どちらかというと従順で、見劣りがし、と殺場の門をくぐる運命にある哀れな存在である。しかし、ヌアーにとってのよく太った去勢牛 (雄牛) は威厳と美しさそのものである。賞賛の対象になるのも牡牛ではなく去勢牛 (雄牛) である。牡牛は感情的・審美的な関心の対象になることはなく、実用的な関心の対象になっているだけである」。(注1)

同じ牧牛でもカカメガのイスハ人とヌアー人では見ている方向が違う。半農半牧のイスハ人の男が牡牛に思い入れし、多数の牛を保有する本格的な牧畜民のヌアー人の男が去勢牛に思い入れしている。イスハ人が見ているのは、敗者ではなく勝者の、猛々しく、男性的で、群れを率いる牡牛である。ヌアー人が見ているのは、手入れがよくされて、ふっくら太った去勢牛である。前者が牡牛に見ているのは戦争のリーダーあるいは首長という傑出した性能をもった男の姿であるのに対し、後者が見ているのは各人の近しい友の姿である。同じ牛の有用性のなかでも去勢牛を友とみて、牡牛の闘牛がないヌアー人と比較すると、イスハ人の牛文化が明瞭になる。このイスハ人とヌアー人の見ている方向の違いは、両者がかかえている環境 (自然的、社会的) に構成した文化のニッチと考えることもできる。つまり生産財としての雌牛の価値は両者に共通する部分であるが、同じオスの牛にたいして

異なった文化的な構築をしている。イスハ人では闘牛というスポーツが、その牛牧文化のニッチのなかでよく目立つ部分を構成していることになる。一般にスポーツは文化的ニッチの中で大きな位置を占めると筆者が考えるゆえんである。

カカメガ地方の闘牛について書かれた論文がひとつある。筆者はこれで、闘牛の隊列が出発するとき、牛主の妻が彼女の下着で牡牛をたたいて、門出を励ますという興味ある事実があることを知った。いずれにしても、その著者（E. カバジ）は牡牛の研がれた角や男たちのもつ棍棒を、ファラスの象徴と見なすような古典的フロイド主義者であるから、彼によれば、この地方の闘牛に人気があるのは、男性的であることがら（攻撃性、征服、性的な力）を心理的に反映していて、闘牛に参加するのは、そうしたことがらを強化することになる^{（注2）}

こうなるとイスハ人の闘牛は、ギアツが描いた二羽の雄鶏が激しく闘うバリ島の闘鶏の方に近いかもしれない（ただしこれはスポーツというよりゲームであろうが）。「バリにしばらく滞在した人はだれでも、バリの男が雄鶏に深く心理的同一化しているのは見逃しようがない」と彼は言う。バリ人にとって雄鶏の猛々しさ、オスとしての性的魅力が重要だ。とにかく、バリ語で雄鶏を意味する「サブング」という言葉は、比喩的に使うと、「英雄」、「戦士」、「チャンピオン」、「有能多芸者」、「政治的候補者」、「独身男子」、「ダンディ」、「レディキラー」、「タフガイ」といった意味になるのだ。バリでの闘鶏は法的に禁止されている。実際ギアツの文章は、彼がたまたま見物していた闘鶏の賭け場に銃を持った警官を満載した一台のトラックが到着し、人々が逃げ惑う場面からはじまる。しかし人々の情熱はそうした禁令をかいくぐっても闘鶏をおこなわせるのである。鶏の脚には刃物がとりつけられるので、闘いはかなり血なまぐさいものになる。驚いたこ

とに、負けた雄鶏は勝った雄鶏の持ち主に与えられ、「彼はそれを、社交上の当惑、道義上の満足、審美的反発、共食いの喜びの入り混じった感情とともに食べる」とギアツは書いている。

彼はこの闘鶏を「ディープ・プレー」（deep play）だと言うが、その「深さ」の大きな理由は、闘鶏のゲーム全体がバリ島の社会的・政治的パターンを再現しているところである。ここの賭けは、カカメガなどとは違って、牛主だけではなく参加者だれもが加わることができる。それにも構造があって、闘鶏場の中央部では正式でメインの賭けが行われ、その周りでは大勢の人びとが、互いにそれぞれ小額の賭けを行う。中央部での賭けは鶏の持ち主を中心にした二つのグループが対決をするかたちで、掛け金が高ければ高いほど、そのゲームの重要度と緊張度が高まる。ギアツが「深いプレー」だと言うのは、掛け金の高さの問題ではなく、とくに中心部の賭けの場面では鶏の持ち主の名前が、つまり名誉が賭けられることである。さらに、それぞれの持ち主に加勢する親族、村人、隣人、友人の名誉が賭かっている。この賭けにおける社会的連携は、周辺部の賭けの状況にまでおよび、人びとは小額であっても決して敵方に加勢する賭け方はしない。こうして「地位のギャンブル」ともいうべきことがらが「深さ」をもたらしているという。

イスハ人の闘牛との関係で言えば、ギアツの記述する闘鶏の特徴のなかで、「動物性」（animality）ということからは興味深い。バリ人は品性上の問題として、動物的にみえる行動（たとえば排泄とか摂食行動）を隠すことに殊更に気をつかう。それにもかかわらず、男が雄鶏という動物にみずから同一視するとき、単に理想的な男らしさをそれに見出すだけではなく、同時に動物的な「暗い力」をもつものとしても見ている。なぜなら闘鶏は、血みどろになって死にいたる破壊的な終末を迎えるという、極端に動物的な力の争いであるからだ。人と動物、見事さと醜悪さ、生と死、

が混然とするドラマに男たちは心を奪われる、とギアツは言う。^(注3)

バリの闘鶏ほど血まぐさくはないが（つまり、死に至るような「暗い力」ではないが）、秩序を破るような暴力性というイメージはイスハ人の闘牛でも明らかである。それは前述のように、シレンベでは牡牛は敵に果敢に立ち向かい、相手の首をとってくる戦士や首長になぞらえられているからだ。そうした荒々しさ又は猛々しさをイスハ人は「ブルル」と言うが、この性質が現在のイスハ人の行政首長にとっても必要だと考えられている。なぜなら、イスハ社会では時に激しい暴力事件が起り、それを抑えることができるのは、戦士のような果敢さなのである。^(注4)

ここでイスハ人の闘牛を文化的なスポーツという点で考えると、激突する牡牛の動物性が、いわばヒトの動物性を照出しているところに特徴があるように見える。これはギアツのみた闘鶏のように、単なる観念上の暗喩ではない。現実にはヒトはウシとともに同じ場所で振舞っているのだ。もっとも、ヒトとヒトが激しく闘う競技でも、ヒトの「動物性」を暗喩しているかもしれない……血を流して闘うボクサーのように。しかし一般に、ヒトと動物がともに競うとき、両者の類似と差異が顕になって、「動物性」は直接に感知できるのであろう……それが荒々しいものであれ、飼いならされたものであれ。ギアツがもしイスハの闘牛を見たら「ディーブ」だというだろうか。確かにここにも社会の地位構造の反映がある（親族・近隣の結束、氏族対氏族の対決）。しかしこれは、賭けの仕方の単純さを含めて、バリ島ほどの複雑さ、深さはない。もしイスハ人の闘牛がバリ島の闘鶏と似ていくらかでも「ディーブ」だと感じられるとすれば、それはスポーツにおいてヒトとウシ（あるいはヒトとトリ）という種をまたがって発露した「動物性」に依るだろう。

前述したように、ヌアー人は去勢牛をほと

んどペット的にかわいがる（まるで、われわれの社会における去勢した犬や猫のように）。牡牛には特に思い入れはない。このことは、イスハ人よりもヌアー人の男のほうが、今でもずっと戦士の実体が残っている南スーダンの無政府的な社会に在ることを考慮すると、いっそう興味深い。イスハ人ではすでに「戦士」は過去の世代に属し、シレンベによる葬儀も終りに近づいている。そうすると、スポーツとしての闘牛だけが「戦士」の精神的伝統を受け継いでいることになる。それに加えて男の最大の精神的価値を維持、継続するのを保障しているのが牡牛という動物だという逆説が興味深い。^(注5)

注1) エバンズ=ブリチャード「ヌアー族の宗教」岩波書店 (p.393-401)

注2) Egara Kabaji 'Masculinity and ritual violence : a study of bullfighting among the Luhya of Western Kenya' Masculinity in Contemporary Africa, edited by Egodi Uchendu, Council for the Development of Social Science Research in Africa, 2008 pp.34-53

注3) クリフォード・ギアツ「文化の解釈学」第5部 吉田禎吾他訳、岩波書店

注4) 詳しくは、中林 1991「国家を生きる社会——西ケニアの氏族」世織書房 3章参照

注5) 最近のニュースによると、カカメガ地方の闘牛もスポーツのショー化という近代の波をかぶりそうである。オバマ大統領が2009年にケニアを訪問した時期に合わせて、観光業者が闘牛を首都ナイロビで見世物にしようと計画をしたことがある。これは実現しなかったが、そのひとつの理由は動物愛護団体が闘牛を「血のスポーツ」だとして反対したことがある。スペインで起きているようなことが、ここでも起きている。なお Youtube などのサイトで bullfighting, kakamega, kenya などと検索すると、実際の闘牛の動画をみることができる。